

内山完造の雑記を読む（続）

内山完造研究会編

はじめに

内山完造（以下、完造さん、1885～1959）は、1913年から47年まで、当初は大学目録の販売員として、途中からは日本書籍を扱う書店「内山書店」の経営者として、上海を根拠地に中国各地で在留日本人のみか多くの中国人と交流し、帰国してからはその経験を生かして日中友好の活動に尽力したことで知られる。完造さんの甥の内山籬を含む私たち数人は、こうした完造さんの生き方に関心を抱き、これまで語られてきた彼の足跡をさらに掘り下げて理解することを目指して、孫安石を責任者として内山完造研究会を結成、幸い2018年本学の学内共同研究助成を得た。そして、この2年余彼の自伝『花甲録』の読み合わせをして、そこに書かれた内容に沿って故郷岡山県井原市芳井町、丁稚奉公した大阪、京都の店の周辺、さらに上海に足を伸ばして彼が歩き回ったであろう先々を訪ねて想像をめぐらしてきたが、そうした作業に加えて取り組んできたのは、彼が中国滞在時に書き残した「雑記」を読み合わせることであった。

ところで、本誌前号の内山籬「内山完造の自筆文書について」が紹介しているように、完造さんが書いた上海在留時期に雑記を記したノートで今読むことができるのは1944年6月から46年10月までに書いた4冊のみであるのは、とても残念なことである。しかし、公表する考えがないままに書いたこの時期の文が読めることで、日中戦争の大詰めに近い頃から敗戦後1年余を経過した頃までの上海や東北地区（以下、満洲）における各種の状況やそれへの完造さんの想いを知ることになり、敗戦4年を経てからまとめた『花甲録』中の同時期についての記述と対比できることにもなって、帰国後どんな想いで日中友好に取り組んでいったのかを考える際の貴重な記録になっていると思われる。

以下は、上記大里・内山・菊池が主に解説を担当し、さらに研究会メンバーで読み合わせた雑記中の、1944年8月18日から46年10月5日までの解説文である。前号に44年6月5日から8月17日までの分を載せた続きであり、これで上述のノート4冊の範囲を網羅することになるが、おことわりしなければならないのは、前号には毎日書いた文をすべて載せているのに対して、今号は大部分を載せたものの、個人的事情を書いたり他人には通じにくいメモ書きをしているごく一部を割愛している点である。完造さんの字が個性的なために解説に苦戦したが、本学非文字資料研究センターで原稿校正の仕事に従事する岡享代さんに字のくせをつかんで解説文（案）をつくっていただいたおかげで、スムーズに読み合わせができた。それでも解説不能な字が残り、それは1字につき□1個を付すか「？」マークをつけた。また、字の間違いや意味の通じにくい表現については、〔 〕内にその訂正や補足をした。さらに、もともと句読点のない文章に適宜それを加え、人名を除いては旧字体を新字体に改めたこともおことわりする。